慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国貴州省・水族の民族文化に関する一考察：端節・銅鼓・水書を中心に
Sub Title	The study on the ethnic culture of Sui people in Guizhou, China : special reference to duan jie festival, bronze drum and sui letter
Author	鈴木, 正崇(Suzuki, Masataka)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.84, No.1/2/3/4 (2015. 4) ,p.211(211)- 249(249)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第1分冊) 論文 東洋史
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150400-0211

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国貴州省・水族の民族文化に関する一考察

――端節・銅鼓・水書を中心に――

鈴木正崇

はじめに

中国における民族の概念は一九四九年の中華人民共和国成立後、一九五四年以降に実施された民族識別によって分類されて定着し、現在の中国は多数民族の漢族と五五の少数民族から構成され、五六の民族からなる多民族国家とされている。しかし、中国における民族は、広大な領域を持つ国家の統一を維持するための政策的意図によって「創られた民族」である。その意味では各民族が持つとされる独自の文化の実態については、歴史的変化を考慮して慎重に検討する必要がある。本稿は中国国内の少数民族で、これまで余り海外に紹介されることがなかった水族（スイ sui）を取り上げて、民族の独自性として主張される幾つかの事象を取り上げて、民族文化の実態について考察を加えることにする。

中国共産党は建国当初は少数民族の「風俗習慣」を尊重するという基本方針を持っていたが、大躍進や文化大革命など政治の大変動で大きく路線が変更された。しかし、一九七八年一二月以降の改革開放政策の展開で、再び「風俗習慣」が見直され、特に「祭り」が好ましい精神文明を養う場として注目されるようになった。一九八〇年代半ば以降は、「民族伝統文化」と名付けられ、民族の一体感や団結を養う機会として利用できるという政治的意図が表面化した。交通機関の整備によって少数民族の観光化が推進され、民衆の経済状況の上昇、インターネットの普及により、更に傾向は増大した。二〇〇〇年代以降は世界遺産や非物質文化遺産の認定や登録に伴い、「文化」のブランド化、資源化の傾向が顕著であ

る。「文化」という名のもとに、操作される様相が顕在化してきた。本稿は水族の民族文化について検討する。基本資料は一九九〇年の現地調査に基づいており、文化の資源化や客体化が始まる以前の状況を伝える。その後に起こった変化の動態を視野に入れ、民族文化に考察を加えることにしたい。

一　水族の概況

水族は中国の五五の少数民族の一つである。しかし、少数民族とは圧倒的な多数を占める漢族に対する相対的な少数であり、少数民族として括ることは問題も多い。二〇〇〇年の国勢調査では、最も多い壮族（チワン Zhuang）は一六二七万八八一一人、最も少ない珞巴族（ロッパ Lhoba）は二九六五人と大きな差がある。水族の人口は二〇〇〇年の国勢調査の統計によれば、四〇万六九〇二人であった。一九九〇年の統計では三四万五九九三人であり、[1] かなりの増加があるが、この中には自然増だけでなく、帰属変更も含まれている。全体の八割は貴州省に住み、黔南布依族苗族自治州の三都水族自治県に集住する。三洞、三都、中和、周賈、九阡などが居住地で、中和、周賈、九阡が古いという。貴州省以外では雲南省に一つの村があり、広西壮族自治区にも若干住んでいる。清代半ばから地方史では「水家苗」「水家」と記されるようになり、一九五六年に「水族」と確定された。この時に重要な基準となったのは、水書という独特の文字が伝えられていることであった。原語はルスイ（泐睢 lesui）で、漢字を変形したり、独自の記号化によって創りだされた文字で、水書先生と俗称される知識人が占いや託宣を行うのに使用していた。ただし、文字の使用は水書先生に限られ、一般の人々は水書の文字を知らないし使うこともない。

民族の自称はスイ（睢、雖 Sui）である。[2] 言語は侗族（トン Tong）に近く、侗傣語派の侗水語系に属し、黔東南に住む侗族とはかなり話が通じるという。居住地の生態系も水辺近くで、平地に棲むという共通性がある。侗族の特徴は鼓楼と集団の歌謡であるが、[3] 双方とも水族では盛んではなく、水族は銅鼓の儀礼を豊富に伝える。水族の由来について、范禹氏（黔南文学芸術研究室研究員。当時）によれば、祖先は江西や湖南から移住してきたと伝える人々と、昔はシーヤー（西雅 xiya）という所にいたが、広東の広州から都柳江を経て貴州に入り三都に来たと伝える人々の二種がいるという。[4] 時代で言え

ば、明代に他の地域から移住したと伝承されているが、故郷については曖昧である。[5] 移動経路は都柳江が有力で、漢族商人の移動経路でもあった。かつては豊富な木材の取引を通して交流が盛んで社会的経済的に漢族とは深いつながりが出来あがっていった。都柳江の中流域は侗族の集住地でもあり、接触する機会はかなり多く影響は各所に見られる。この地域の少数民族は、瑤族（ヤオ Yao）にせよ苗族（ミャオ Miao）にせよ、類似した移動伝説を伝えており、故地は海辺や河辺と語られ、長江（揚子江）の中・下流域へと遡る。原郷の地を豊かな地に設定しようとする想いが籠こめられている。広東から来たという言い方は、瑤族に多く、その前は江南にいたといい、積極的に長江流域からの移住を主張する。三都の県城近くに住む水族の村人の話では、水族の死者の魂は死後は三つに分かれて、一つは家の中の祖先の祭壇、一つは祖先の墓、もう一つは祖先の故地であるシーヤーに行くと信じているという。しかし、シーヤーがどこにあるのか誰もわからない。この地の少数民族に共通して見られる原郷意識は、事実と伝承の間を揺れ動く動態的な歴史意識である。

水族の居住地は谷沿いが多く、生業としては水稲耕作を営み、生活形態は侗族や布依族（プイ Pui）との共通性を示す。一方、苗族や瑤族は、水族・侗族・布依族よりは標高が高い所に住む。本稿では一九九〇年に水族の年間最大の祭りである端節（トゥワンチェ duanjie）に参加した時の記録を主体として、祭祀・婚姻・葬制を軸に民族文化の諸相を検討する。水族に関しての研究は、中国国内は別として、海外の研究は余り多いとは言えないので空隙を埋める役割もある。「民族伝統文化」や「民族文化」という用語は、一九八〇年代半ば以降は行政用語になったが、地元の人々の民族意識を高める役割を果たしたので、概念としては曖昧だが、実態を通してそのあり方を考えてみたい。

二　端節の諸相

端節とは水語ではチェトゥワ（借端 tsje twa）、チェは水語で「食べる」、トゥワは「新たな時の始まり」（開端、歳首）の意味で、食事を一緒に食べて楽しむ年越しの行事である。端節は年の変わり目の儀礼で、行われる時期は、稲の収穫期に合わせて村ごとに日付が異なり、旧暦の八月の初めから九月いっぱいで、遅くとも一〇月初めには終了する。現在では順番が決まっており、最初

に都匀市の王司地区の統領（別の説では灯頭）で始まり、最後は三都県九阡区で終る。この理由は水族の祖先は初めに現在の三洞に来て、そこで一緒に住んでいたが次第に人口が増えて分かれて住むことになった。しかし、最大の祭りの端節の時には皆が交流しあえるように日付けを違えて祝うことにして籤を引いて、移り住んだそれぞれの地区の祭りの順番を決めたのだという。別の伝承によると水族の祖先のうち一番上の兄が住んでいた所が王司の統領でそこを祭りの始めの地とし、二番目以下の兄弟達はそれぞれに分かれて住む時に籤を引いて、定住した場所の祭りの順番を決めたとされる。総じてこの伝承には、水族の社会が端節をめぐって大きく再構成された状況が投影されているとみられる。宗教的基盤は父系血縁集団による祖先祭祀で、社会・経済・文化の中核にある。時代の変化に伴ない、地縁や血縁を超えて広域のつながりを構築し、全体を一つに統合する意識が次第に生成されてきたのであろう。ただし、一年の区切りの大祭として端節（水暦一二月から二月、陰暦八月から一〇月）を行わず、「卯節」（借卯 tsje mau）を異なる時期（水暦九月から一〇月、陰暦五月から六月）に行う村落や血縁集団もあり、複合的になっている。[6] 双方とも祭りの日付は水族独自の暦に従って決定される。

一九九〇年の主な端節は八ケ所で行われ、①九月一九日（旧八月一日、丁亥）、都匀市王司地区、②一〇月一日（旧八月一三日、巳亥）、三都県拉佑村、③一〇月一三日（旧八月二五日、辛亥）、三都県水東郷、④一〇月二五日（旧九月八日、癸亥）、三都県連牌・恒豊、⑤一一月一日（旧九月一五日、庚午）、三都県塘州郷、⑥一一月六日（旧九月二〇日、乙亥）、三都県三洞・地祥・中和、⑦一一月一四日（旧九月二八日、癸未）、三都県牛場郷（堯麓郷）、⑧一一月一八日（旧一〇月二日、丁亥）、三都県九阡区水昂村であった。祖先や同姓、居住地によって異なる。一九九〇年に我々が参加したのは、三都県牛場郷と三都県九阡区水昂村の端節であった。端節の集中する時期は旧暦八月の半ばから後半で、亥の日を主体に行われ、小さな端節もこの時期に多く執行される。毎年日付が固定しているのは、④の連牌・恒豊で陰暦九月の第一の亥の日に決まっている。水族の居住地は陰暦八月が収穫の季節で、これを終えた陰暦九月を水暦の正月とする。新しい年の最初の亥の日を端節の始まりとすることが最も好ましいという人もいる。[7]

端節は年越しの行事で、祖先祭祀を行い収穫祭の様相

もある。祖先や家族が一緒に集い、豪華なご馳走を「食べる」（水語でチェ）ことが祭りの中核である。[8] 各家ごとに前の日の夜に祖先を迎える用意を整え、祖先を祀る棚の前に、綺麗に洗い清めた器を置いて供物の品々を盛り合わせる。魚を主体として、野菜と果物、特にカボチャを沢山盛り付けて、酒と糯米飯も供える。衣装や首飾りや農具まで陳列して、現在の幸福な状況を示す村もあるという。深夜になって家族が集まり、銅鼓を叩いて祖先をお迎えし、家族の繁栄と安寧を祈願して祀る。翌日になって、年越しの慶びを祝い合い、供物を供え直して皆でいただく。祭祀が終了すると、砂糖菓子や干魚などは子供に与えられる。その後に屋外に出て、祭場の「端坡」へ行き、沢山の村から集まって来た人々と一緒に馬を飛ばして競い合う競馬（賽馬）を挙行する。「端坡」とは漢語表現であり、端節の祭場となるなだらかな斜面の坂をいう。「端坡」には沢山の成人の男女が集まり、歌の掛け合いをして恋愛する。一六歳以上であれば結婚できるというのが水族の慣習である。端節は年越しの祖先祭祀で、祖先の霊を慰めて子孫の繁栄を祈る。若者にとっては良き配偶者を見つける絶好の機会である。水族は魚を供物として捧げ、馬を使う行事に参加して相互の一体性を再確認する。なぜ魚と馬なのか、その意味を解明することが水族の心性を理解する鍵になると言えよう。

三　龍台村下台寨の端節

三都県牛場郷（標高は約四〇〇米）の端節は気持ち良く晴れわたった日に行われた。一一月一四日であった。場所は三都の県庁から南に行ったさほど遠くない所で、午前九時頃から行事が開始された。到着するとバス道は一時通行止めになり、沿道に色とりどりの小旗をもった歓迎の人々がずらりと並び爆竹がけたたましく鳴らされる。道の両側には露店が並び、ピーナッツ、お菓子、蕎麦、おこしなど食物を売る店が目立ち、保険の勧誘屋もいる。現地の人の話では、牛場という地名は市場に因む新しい名称で、一九八九年に元の地名である「堯麓郷」に戻したという。全人口は七五六七人、戸数は一七〇一戸、水族が全体の八九・七六％を占め、その他は苗族、布依族、漢族であるという。郷は八ヵ村（その中の組は五四）から構成され、中納・牛場・龍台・姑掛・中楽・夭寨・行償・順河である。案内されて訪問した村は龍台村で、更に下台寨（一・二組）、上台寨（三組）、姑龍寨

（四組）、茅毛寨（五組）にわかれ、今回の端節は下台寨の主宰である。寨の人口は三四六人（男一五九、女一八七）、戸数は八六戸で、王姓の人が九〇％を占め、後は呉、張、李であるがいずれも少数である。王姓の人は相互に結婚できないので、通常は他の寨の他姓と結婚することが多い。父系血縁で族外婚の規則を遵守しているが、近隣での結婚が多いので結果的には近い血縁の者同士が近接して住んでいることになる。下台寨は王姓の人々が祖先を別にする二つの集団（父系リネージ patri line al lineage）からなる複雑な形態をとっている。この日の午後の競馬を主宰するのは王姓の家の人々で、端節は社会的立場や同姓集団の結束の強さを公の場で示す絶好の機会になるといえよう。この日は王姓の人々の祖先を祀る端節で、他姓は加わらない。

民族事務委員会の潘朝豊氏（主任。水族）と陸清水氏（水族）、保険公司経理の熊慶康氏、郷書記の李小祥氏などが先導役になって村の中に案内された。寨の入り口には土地神の小さな祠があり、供犠した鶏の白い羽が散乱していて、儀礼が行われたことがわかる。土地神は村に悪いことが起こらないように守ってくれる神でご神体は石であるという。寨の内外の境界認識は明確で、寨が一つのまとまりを持つことが分かる。賑やかな楽隊（銅鑼、太鼓、シンバル）の出迎えをうけ、爆竹がたかれる。寨の入口で歓迎の挨拶と酒の振舞があり、簡単な村入りの儀礼を行う。道の中央に台が置かれ、魚を二匹入れたお椀が正面にあり、真ん中に豚の血を入れたお椀と赤白の糯米飯、手前にカボチャが供えられている。魚は田圃に水を張って飼っていて鯉であるという。集落は山を背にして正面が山でさえぎられないような平地に立地する。前面が開けて背後に山を背負うという漢族の風水の考え方の影響もあるようだが、自然な立地とも言える。各家はかなり密集して建てられ、二階建てで下は物置の高床式である。居住する場所が上部にあるのは、湿気を防ぐためで、多雨地帯で生活する知恵である。

細い路地のような道路をたどっていくと、家の中から銅鼓の響きが聞こえてきて、そのうちの一軒の王興業（ワンシンイエ）氏の家に導かれた。家の中の中央、堂屋の正面に祖先を祀る棚があってご馳走が沢山供えられていた。正面に香炉があり、供物台には、酒壺、糯米酒、魚、乾燥煙草、豆腐、赤白の糯米飯、カボチャを供え、盃と箸が五組並べられている。祖先への供物としては魚が重要で、腹の中にはズイキ芋が入っている。カボチャ（南瓜）を重視し

て沢山供えるので端節を「瓜節」と呼ぶ地域もある。[9] トウモロコシと粟も脇に掛けて供えられる。酒は二か月前から仕込む。右手には祖先が使った衣類や道具、帽子・靴・上衣・ズボン・キセルが籠に入れて置かれる。年寄りは煙草が好きなので喫煙用具一式を置くことが多い。一年間以内に亡くなった人がいれば、霊堂（香亭）という特別な祭壇を造って祀るが、この家にはなかった。[10] 祖先祭祀は午前〇時過ぎから始まり、祖先を招く祈願をする。「ご先祖様は家の入口からまっすぐ入って来たよ。祖先はもう来ていて私たちと一緒に食べている」といった声が聴かれた。祖先が招かれると一緒に食事をする。祖先は魚、特に酸っぱく味付けした煮魚とカボチャを好み、肉類と脂物は食べない。基本は魚と野菜だという。祖先が招かれた深夜以降は、精進が解けるので一般の人は肉を食べてよい。深夜から酒が飲み続けられて多くの人は酔っぱらっている。

銅鼓は祖先棚の左手の部屋の中央部にあり、専用の鼓杵を使って、太い丸太の梁から釣り下げられていた。稲穂がたわわに掛けられたその下に銅鼓があって、女性が盛装して右手に持った棒で平面を叩き、左手で細い棒を扱って縁を打っていた（図1）。押さえたような低い音とやや甲高い音が微妙に交錯する中で、後から男性が桶を銅鼓の空洞部分に近づけたり離したりして共鳴させ、異様に盛り上がった音に変えていく。このやり方は水族に限らず苗族や瑤族にも共通した手法である。[11] その脇の玄関寄りの所には、男性が控えていて牛皮をはった大ぶりの木鼓（縦置きの円筒型単面鼓。泡桐樹か馬桑樹を使う）を、銅鼓に合わせて撥で叩く。決して変化に富んでいるとは言いがたいのだが、単調な音はいつまで聞いていても飽きがこない。叩いていたのは雄の銅鼓で一個しかないが、一九八九年に雌の銅鼓が盗まれてしまったた

図1　銅鼓を打つ水族の女性

めだという（噂ではベトナムに流れたという）。この寨の端節で銅鼓を叩くのは、端節の前日・当日・翌日の三日間と決まっている。銅鼓を叩く期間は収穫の後から翌年の清明節までと定められていて、端節は収穫後にあたるので、この日が叩き初めの日になる。水稲の種まきは清明節の頃で収穫は八月なので、銅鼓を叩いてはいけない期間は農繁期にあたり、生業の暦と連動している。銅鼓はこの地区には九つあったが、二つ盗まれて現在は雄ばかりで七つ残る。銅鼓を叩くのは現在では男でも女でもよいが、かつては雄と雌の銅鼓がそろっていて、雌は二人の女、雄は二人の男で一緒に叩くのが正式なやり方であった（さらに昔は男性だけが叩いたという話もある）。雌は平面に月の文様を描き柔らかい音を出すのに対して、雄は太陽を描き甲高い音を出す。売買する場合には雌の方が高くなるので、盗人は雌を狙うらしい。

四　銅鼓による交流

水族は膨大な数の銅鼓を所有することで知られ、三都県文化館の調査では三都水族自治県では三一四個の銅鼓が確認されているという[12]。解放後の大躍進で大量の銅鼓が供出されて鋳つぶされ、その後の文化大革命では使用が禁止されて没収されたりしたのでかなりの銅鼓が失われた。推定では解放前は一〇〇〇以上もあったのではないかとされる。銅鼓は神聖視され、取り出す時や叩き初めの時には決まった儀礼や作法がある。端節では銅鼓は深夜の祖先招きの時に初めて叩く。日中は祝祭的な気分で楽しげに打ち、後から後から人が交替していつ果てることもなく続く。銅鼓は四月の清明節から収穫の終わるまでは叩いてはいけないという禁忌があり、端節は叩き始めの機会となる[13]。叩くことが禁じられている期間は穀物を収納する倉に保管して稲で覆っておく。農繁期に銅鼓を叩くと雷が鳴るとされ、禁忌である。金属と水は合わないとか、銅鼓と龍や雷が喧嘩をした話が幾つか語られている[14]。

銅鼓は雷鼓とも呼ばれ雷神との関わりは深かった。元々は雷神（天神）の太鼓であったが天から下賜されたという伝承や、雷神の息子の蛙を造形するなど雷には様々な言い伝えがある[15]。水族の結婚式に際しては、花嫁が行列を作って花婿の家に向かう時に雷が鳴ると一三日間は実家に戻ってはいけないとされる。花婿は水書先生（フーカイ fu kai）を呼んで鬼や雷を祓う厄落としの儀礼を行わないといけない。結婚式の時に雷が鳴ることは

不幸をもたらす。一方、春の初めの雷は吉兆だという。雷が木を倒すことや落雷で山を壊すことは神の降臨で吉事である。落雷は雷神の出現であり、人間にも憑依すると考えている。雷は作物の豊穣をもたらす雨を降らすので作物や人間にとっては「母の兄弟」（母方のオジ）のようにいつも頼りになる存在だが[16]、雨を恵む一方で、気に障れば大洪水を引き起こす。山中での豪雨は時には鉄砲水や土砂崩れなどで、人を溺死させたり、村落を破壊するなど甚大な被害をもたらす。山中での恐ろしい体験、特に自然の脅威が雷に集約されてイメージ化されているのかもしれない。荔波の近くで布依族が住む水春村を訪れた時には「雷よけの御札」が家にあることを発見し民衆の畏れを実感した。

銅鼓はその音に特別な力が宿り、霊界に働きかけて、祖先、神、霊を招き、草木に宿る魂が呼び覚まされる。稲の魂にも働きかけて作物の豊穣をもたらし人々の生活を幸せにすると信じられている。しかし、銅鼓の取り扱いは慎重である。使用を特定の時間に限定すると音の力が効果的に発揮されるらしい。銅鼓は霊や呪力の宿る神聖な器として神や祖先であるかのように崇められ、生命体と考えられている。悪龍や虎を退治した話も伝わる。音を主体とした多義的な作用やその力への信頼は、無文字社会にとっては想像以上に大きかった。農作業が継続し日常生活が続いている間は、できるだけ音を出さずにおいておき、収穫の終わった後に一斉に銅鼓を出して、祖先と交流し、収穫を感謝して幸せを祈る。その鮮やかな生活リズムの転換が彼らの暮らしを生き生きとしたものにした。銅鼓の保管法は定まっていることが多い。水族でも連牌地区は厳格で手続きが細かく決められていた。普段は倉の中に銅鼓を置いて、内部を米の籾で満たして保管し、人を寄せ付けないようにする。取り出す時は村の巫師（フーチャイ fu chai）を頼んで呪文を唱えてもらい、酒を捧げて稲穂をお祓いのように銅鼓の上で振ってから叩くことが許される。黔東南の苗族の格細村で見た保管方法も、銅鼓の中に籾をいれて、その上を稲束で覆っていた。しかし、よそ者の我々は保管場所に立ち入ることは許されなかった。

銅鼓は貴重な財産で保持すること自体が大きな誇りになっている。水族は銅鼓の製作技術をもたず、入手は現金購入なので、普段からお金を貯めて備えをしておく。購入する場合は、広西にある銅鼓の製作地に依頼する。時には市に売りに出されるので、品質や由緒を吟味して

購入を検討する。使用方法は雌雄を組にするので雌雄一対で手に入れるのが望ましい。

銅鼓の所有権は下台寨の場合は王氏の祖先が購入したので私有であるという。貴州省西南部の鎮寧県の布依族の村、石頭寨で聞いた時も原則は私有とのことであった［鈴木　一九八五：二〇九～二一〇］。これに対して、荔波県の瑤麓の青瑤の銅鼓は村の共有で、広西の南丹県の白褲瑤は、銅鼓を系譜上の祖先を共通とする父系血縁集団のリネージ（lineage）でポープー（破不po bu）、あるいは油鍋（ユーグオ）と俗称される人々が共有する［鈴木　二〇一二：四四一～四四四］。銅鼓は民族を超えて共通して使われてきているが、担い手は様々である。

銅鼓は水族では結婚式、葬式、端節などかなり頻繁に使われる。黔東南や黔南の苗族は陰暦一〇月の苗年（ノンニャン。年越し）や一三年に一回のノンニュウ（鼓社節、鼓蔵節）など大きな行事に使用し、白褲瑤は葬式にしか使わないなど、それぞれに異なる。銅鼓を叩く場所は、水族は家の中だけでなく田圃など外でも良いという。家の中では、昔の祖先や最近の先祖を祀る祖先棚がある堂屋で叩く。堂屋には家族を病気から守る竹も祀られる。[17]銅鼓は様々の霊の発動を呼び覚まし、祖先や先祖を招いて子孫と交流する祭具で、死者供養だけでなく祝い事にも使われる。銅鼓は社会の外部からもたらされ、神秘的な音をたてる貴重な宝物とみなされ、「異音性」「外部性」「装飾性」などで象徴効果が発揮される。異なる言語や習俗を持つ人々が、古代以来の祭具として長期にわたって継続・維持してきた精神の歴史を基盤として、単なる物質としてのモノではない複雑な意味と機能を変化させつつ伝えてきた。

五　祖先を祀る供物の魚

祖先を祀る棚には香炉があり、その下に机を置いて供物を並べておく。下台寨の王氏の家では端節の祭壇は全体が四列になっていて、一番奥の列は酒壺（二ヵ月前に糯米から醸した酒、甜酒）と線香立て、二番目の列は酒盃、魚を茎で縛って奥へ向けたもの（中には魚の味を良くするというズイキの葉が入っている）、乾燥した葉煙草が沢山あがっているのは、年寄は煙草が好きだからだという。一番手前の列は酒をついだ茶碗が五つと箸が五膳あり、これは五代前までということなのであろうが、個々の先祖の名前を唱えるということは特に行われない。

机に向かって右脇には、先祖が使うもの一式を籠の中

にいれてあり、帽子・靴・上着・ズボン・キセル・雨傘などを、実際に使用できる状態にしておき、先祖との密接な交流をする感情を表す。雰囲気としては、日本のお盆によく似ている。祭壇の祀り方は家ごとに異なるようである。供物は前日に用意して、供物を載せる皿や鍋は念入りに洗ってから盛り付ける。先祖を祀るのは端節当日の真夜中の一時過ぎぐらいからで、線香に灯をともすと、先祖は玄関から入ってくるといい、酒を捧げてお迎えして食物を食べさせる。先祖は魚と野菜に手を付けると観念される。祭りが始まって先祖を迎え終わるまでは肉類や脂物は食べてはいけないとされ精進を守る。ここ一年間のうちに亡くなった人は霊堂を作って祀る。端節には祖先や先祖一般がお迎えを受けることになる。この区別の仕方も日本のお盆に類似していて興味深い。もてなし方は丁寧で、実際に人間がやってきたかのようであり、血縁の繋がり、特に父系の系統がいかに大切にされているかがわかる。

先祖の供物の特徴は、魚、カボチャ、赤と白の糯米飯で、特に魚とカボチャが先祖の最も好むものなのだという。この三種の供物は寨の入り口の祭壇と家の中の祭壇の供物に共通する。赤白の糯米飯は特別の日の食物で目出度さを表す。魚には酸味を付けて煮るのが最高で、食べるととても気持が良くなるのだという。ご馳走としては、一番重要なのは子豚、次が魚、その次が鶏だという人もいる。なぜ魚が供物として重要なのかについては、水族の祖先は昔大河の流域か海の近くにいて魚をとって暮らしていて魚を大切にしていたので、祖先を忘れるなという意味で大事な供物にするのだという。同様の考えは水族ほど魚にこだわらないが、苗族にも同様の習俗があり、魚を供物にするのはかつて祖先が長江中流に住んでいた時の食べ物と同じものを食べさせて祖先を偲ぶからだという。また、魚は活力旺盛で繁殖力が強いので子孫繁栄をもたらす願いを籠めるとされる。

水族の結婚式に至る過程でも魚が大きな役割を果たす。男性側と女性側が双方から二人ずつでて古酒で四杯ずつ交換して飲んで結婚を承認し、次の段階の接親では結婚の日取りを、水書先生か寨老が持つ水書に基づいて選ぶ。吉日は男女の「生辰八字」（生年月日の時間）で決まる。式の前日に花婿側が花嫁側に使わす使者四人（男性二、女性二）を中年の女性が連れて、豚肉と糯米飯と共に「魚筌」（うけ）を持って女性の家に行く。これは魚を採る道具だが、祖先を忘れないという意味と実際に魚を

とって食べることと、祖先を片時も忘れるなという想いが籠められている。この時に山に生えている魚の形をした木の葉「金網籐葉」を六枚持参する。これは魚に似た葉っぱである。このように結婚式という親族の再編成をする重要な機会に、祖先からの繋がりを確認する手段として魚を表す象徴が多用される。魚の繁殖力にあやかり子孫に恵まれ、子供が逞しく成長するようにという想いも籠める。学者の中には祖先を魚を先祖とするトーテミズムの名残りと考える人もいるが、トーテムは分類体系に過ぎず説明にはならない。総じて端節は血縁集団の祖先祭祀の性格が強いが、お椀や箸で示され五代といった具体的な世代数で表される具体性を帯びた「先祖」と、魚に代表されるような源郷を漠然と意識させる「祖先」とが、同時に含まれているのではないだろうか。

近い先祖と遠い祖先、具象的な先祖と抽象的な祖先、さらに一年の間に亡くなった生々しい死霊も形見の品や写真、そして絵などを添えて祭祀する。正面には追悼文を掲げる。先祖・祖先・死霊という三層にわたる水族の霊的存在の認識がある。下台寨の端節は王姓の人々の祭祀で、あくまでも一族の祭りという閉じられた様相であるが、供物としての魚や後に述べる馬などの象徴に託して各家や一族を超えた地域共同の繋がりも確認するという開かれた性格をもっている。ただし血縁集団の意識は強く、下台寨では王姓の次に人口の多い楊姓やそれに次ぐ張姓の人々は別の日付に端節を行っていた。一九九〇年は王姓の端節が最後なのだという。姓、祖先、居住地によって端節は別々に執行され、干支により日付が決められている。漢族の慣行である干支で、祖先祭祀の日付が決まるが、祭祀の日程は祖先が定めたことだという。水族の端節は収穫の終了後に別々に行っていたが、おそらくある時期に暦を使って特定地域の祭日をずらしながら再編成したと推定される。それは、端節を精神的な統合の機会とする水族の「祭祀圏」の意識の生成と関わっていたのであろう。原点には祖先に代表される血縁集団の繋がりを、祭祀を通して自らの生き方を再確認する機会とする意図がある。同時に地縁や血縁を越えて広く相互に交流しあい、特に若者同士を結び付ける機会を提供する「婚姻圏」を再構築したとも言える。

六　社会の諸相と馬

家の中では客人や親戚、友人などが集まると宴会が始まる。お迎えした祖先や先祖達と子孫が一緒になって年

頭の食事をするのである。祭壇から供物がおろされて、盛装した娘達が席をまわって大きな瓶から酒をついでまわる（図2）。お互いが酒を飲ませ合う場合には、みんなが手を繋いで手渡しで飲ませるのが水族独自のやりかたである。宴席に案内されてご馳走に預かる。供物としては子豚が最上位、次いで魚、そしてニワトリの順とされ全てが用意されていた。子豚の血、子豚の心臓、子豚の腸詰め、水牛の肉、水牛の肝、魚、鶏、南京豆、胡麻、糯米飯、瓜などである。普段の食事は白米やアワやイモなどが中心であるからこの食事がいかに豪華なものであるかがわかる。

図2　水族の女性の盛装

家の戸主の王興業氏の年令は四三歳、子供は男二人女二人で、長女は結婚して夫方に婚出している。奥さんの楊花さんは上台寨（三組）の出身である。寨ごとに近い血縁のものがまとまって住んでいるので、嫁は別の寨からもらう典型例である。下台寨の景観は谷間にあって前に田畑が広がり、現在は水稲耕作が中心であるが、一九六〇年代までは焼畑耕作も行っていた。そのやり方は三月に樹木を伐採して火入れを行い、灰を肥料にして四月の清明節の頃に種を播く。栽培するものは一年目はアワ、トウモロコシ、イモ、陸稲で、一九七〇年代からは菜の花（油菜）が加わった。二年目も同じ作物を植えるが、夏に沢山植えるようにして、粟、菜の花、エンドウなどを多くとる。三年目くらいが栽培の限度で、その後しばらくの間は放棄して地味の回復を待つのである。現在の状況は寨の水田は八五ムー（畝。一ムーは六・六六七アール）、畑は二六ムー、森林は三三平方キロメートルあり、主な作物は水稲、トウモロコシ（家畜用）、ダイズ、生姜、ササゲ、サトイモ、菜の花、トウガラシ、タバコを作る。水稲は一ムーあたり七二四グラムで、よくとれるとされる量は一〇〇〇グラムなので標準以下であ

る。家畜は馬で小型馬、その他は山羊・黄牛・家鴨などで、家では蜜蜂を飼い蜜をとって現金収入を得る。市場は県城の三都に行くか、六日ごとに市が開かれる牛場へ行く。かつては牛場の賑わいはたいしたもので三都からやってくる程だったという。

水稲耕作の重視は信仰の諸相にも表われ、収穫の終了した後に、水田の真ん中に茅やススキの穂を立てて稲の再生を祈る習俗が各地にある。大事な銅鼓を叩くときに稲穂を添えて吊り下げたり、稲でお祓いをしたり、稲倉に保存したりするなど稲との繋がりが濃厚である。しかし山地と平地という異なる生態系が交錯するこの地では、違う種類の作物を栽培して、他の産品と合わせて交換する市の働きも重要であって、特にこの村は、町に近いためか市の果たす機能も組み入れた農業を行い、経済的にはかなり豊かな暮らしをしているといえよう。

午後二時頃からは集落から少し離れた田畑の中で競馬（賽馬）が行われる（図3）。各集落から飾り立てた馬に乗ったり、引いたりしながら、軽やかな鈴の音をたて、三々五々集まってくる。馬は貴州に多い小型馬で、山地で暮らす人々にとって斜面を縦横に往来するこの馬は欠くことができない。祭場には西から東に向かって一直線の馬の駆ける道を整備して作りあげている。本来はなだらかな山の斜面、「端坡」で行われるべきで、その地形は風水により龍脈を見て決定する。水族はかつて三洞あたりにいたが人口が増えて各地に広がり、その時に各地の端節の日をずらして行うことにして、競馬をする端坡も全部で一六ヵ所設定してお互いに楽しめるようにしたという。地元の人は「坡賽馬」であるべきなのが、今は「田賽馬」になったと嘆いていた。競馬は黔東南の苗族の祭祀では、旧暦六月一九日に行われる凱里郊外の香炉山での祭り、爬坡節が有名で山上で競馬が行われる［鈴木　一九八五：一九八］。きれいに飾り付けられて額に鏡をつけた馬が屋根の上を山上めがけて疾駆し、馬が神様にお参りするようでもある。本来は山を意識した祭祀が競馬のあり方だったかもしれない。

開始の時が近付くと、沢山の見物人が詰め掛けてくる。祭場のなだらかな斜面の「端坡」は、丁度浅い谷間になっていて、斜面には盛装した少女達がきらびやかに腰掛けて花がさいたように華やかになる。他の少数民族と同様に、衣装で未婚と既婚の区別がつくようになっていて、未婚者は足にまとう布が長く、衣装の腕の部分に縁取りがあり、髷を結って櫛をさし、とんがりのある白色

図３　馬をとばして競う

の被り物をつけるという。[18] 既婚者は白色の平たい被り物、年寄りは青色や黒色の被り物を使う。端節は若い男女が公の場で自由に交際できる時であり、若者にとってはよき配偶者を見つける絶好の機会である。若い男女の交際の場なので、若者は特に装いを凝らして祭りの場に臨む。市と祭り、これが男女の交際の場であり、うまく結婚にまで発展するように活動する。「端坡」は男女の若者のためにあると言ってもよい。一方、小さな子供たちは魔よけの小さな菩薩を巡らした帽子を被っているのが印象的である。これは苗族とも共通した習俗で土地菩薩を縫い込んである。水族独自の衣装としては、子供の背負い布が立派で、見事な刺繍が縫い込まれている。特に馬の尻尾の毛を綯いこむことが特徴で馬と人とのつながりの強さを感じさせる。交通事情の良くない山の中であるが、この日ばかりは遠方からも沢山の人がやってきて祭場の周囲を埋め尽くし、思い思いに祭りを楽しむのである。

競馬が始まる前に、白い線の引いてある出発点には、手前に藁を敷いて、巴茅草（茅）を一本立てておく。そこに寨老という村の長老で、祭りを執り仕切る司祭役の人物が出て、唱え言をしてから巴茅草を抜いて四方に投げる。これを「開馬道」という。この行事に参加する

人々の無事を祈ると共に神に感謝する意味があるという。茅はこの地方では祭りに欠かせない儀礼植物で、とんがっていて切れることから剣にみたてられ、魔除けに効果があるとされる。決勝点には目立つ赤布を二本の杉の木に掛け渡した門があり、ここを目がけての短距離決戦である。競い合うのは狭い道なので、二～三頭が並ぶといっぱいになってしまい、時には土手を越えて見物人の中に突っ込んでいったりして近くで見ているとかなり危険である。参加者は子供から大人まで様々で、決勝方式だというが、今一つ規則がはっきりせず、優勝馬を確かめることができなかったのが残念である。馬は水族の日常生活に欠かせない動物であるだけでなく、馬の尻尾の毛を綯いこんで刺繍した見事な子供の背負い帯を作るなど生活道具にも用いられ身近な存在になっている。

儀礼でも魚と並んで馬が重要な役割を果たす。例えば葬式の埋葬にあたって死者が男性の時は馬を供犠し、埋葬後に家に戻ってきてから肉を共食する。次の日に、死者の息子はお酒と殺した馬の首を母の兄弟の所に贈り物として持っていき、巫師（shaman）には馬の腿部をあげるという。他の民族では、馬の供犠はあまり聞いたことがなく、水族の独自性を表しているようだ。霊界や他界へ導く馬のイメージがある。山のなだらかな斜面で馬を走らせてかけ上がる競馬はかつては「山裾から頂きにかけ登った」といわれた。山上は霊界との接点であり、天翔ける馬へと変容していくのではないか。

七　水昂村の端節

三都県九阡区水昂（スイアン）村（標高は約七〇〇米）で行われた端節は、堯麓郷下台寨の端節とはうって変わって雨のそぼ降る肌寒い天候のもとで行われた（一一月一八日）。場所は三都水族自治県のかなり南で、三都から七五キロメートル、荔波の町に近い山の中である。正確には楊拱郷水昂村で五八戸、六八〇人を数える。郷には永陽（楊姓）、新陽（韋姓）、高農（潘姓）、藍董（潘姓、石姓、韋姓）、系大（石姓、潘姓、韋姓、楊姓）、水少（韋姓）、水昂（石姓）の七つの村がある。[19] 水昂村は全て石姓で端節も石姓の人々の祖先祭祀である。端節は水暦で一二月から一月・二月（陰暦八月から一〇月）にかけて行なわれ、この村は最も遅い端節である。一方、近くに住む潘姓の人々は端節を祝うことはなく、卯節を陰暦六月六日に行うという。ここには石姓は加わらない。卯節は九阡地区で多く行われ、水暦九月から一〇月（陰暦五・六

月）の卯日に祖先を祀るという。[20] 年間最大の行事として、「端節」を盛大に行う村と、「卯節」を祝う村があり、血縁が異なることと、稲の収穫期（陰暦八月）を重視するか、成長期（陰暦五月）を重視するかの違いともいえる。さらに、卯節も端節も行わず水暦で四月（陰暦一二月）丑日に「蘇寧喜節」（sunjeienci）、俗称では娘娘節を行う三都県和勇郷の呉姓の事例もある。[21] この日は、ニーハン（尼杭 nihang）と呼ばれる女神（漢語では生母娘娘）が子授けに来るという。[22] また、春節を「荐節」として最大の行事とする村もあり、それぞれの血縁の系統が異なるようである。[23]

石国義氏（水族。一九三八年生。当時五〇歳）に案内して頂いたが、水昂村はご自身の故郷で実家に案内された。石国義氏と弟の石国仁氏が住む家であった。石国義氏は一九九〇年一〇月に三都で発足した「水族自治県民族研究所」の所長を務めており水族の研究の第一人者で、村の知識人である。

家の中央の祭壇には一九九〇年の四月三日に九一歳で亡くなった母親の潘醒さんが祀られていた。正面の祖先棚の上に故人を偲ぶ追悼文が掲げられ、その下に作られた祭壇には死者の写真と、女性の盛装した時に首に掛ける銀の飾り物（銀項圏）が形見として置かれていた（図4）。供物は最前列に子豚の肉、魚二皿、白菜と魚の内臓、二列目は柚子、林檎、蜜柑、柚子など果物類、三列目はゆで卵、豆、独山塩酸葉、四列目はピータン、葱、生姜である。手前には、子豚の血、酒、糯米飯、六つのご飯の椀と酒入りの茶碗が六つ供えられていた。料理は全て奥さんが作り前日の午後八時には整えた。石国義氏の奥さんは韋愛英さん（四二歳）で、子供は女性三人（一七歳、一五歳、一二歳）、末っ子に男の子（一〇歳）がいる。この家は系譜に従って十代は確実に遡れる旧家

図4　端節の死者供養

で、清の道光年間（一八二一～一八五〇）に三洞から水昂村に移って来たという。さらにその前は中和にいて、遡ると広西にいたとされる。

家の中に通されると銅鼓の音が鳴り響く。かつてはこの村には銅鼓が一〇個ほどあったが大躍進や文化大革命の時期にかなり鋳潰されたり供出させられたりして、現在は三個残り、いずれも雄だという。祖先の祭壇の下には供物が五列になって供えられていた。一番上手の列には豚肉（血の固まりを煮たもの）、魚が二皿、白菜の中に魚の内臓を入れたもの、次の列は柚子、林檎、蜜柑、柿といった果物類、その手前の列は南京豆とゆで卵が三皿にこの地の名物の独山塩酸葉（辛くて甘酸っぱい漬物）三皿、更にその手前にはピータンとネギと生姜に豚肉のそぼろ状の盛り合わせがつく。ここでは先祖のために四つの酒杯と四膳の箸があげられていた。酒は糯米を発酵させた甘い酒、甜酒である。端節の行事は前日の夜八時頃暗くなってから、祭壇を造り果物を供え付けて線香に火を灯し、紙銭を燃やして先祖迎えをする。料理は韋愛英さんが、主人の弟の王国仁氏の奥さんに手伝ってもらって早朝から作ったという。朝食を食べてから銅鼓を叩き始める。親族の人が入れ替わり立ち代わり訪問して祖先を拝む。銅鼓を叩いて死者の霊を慰める。

端節には村の神々にも供物を捧げて祈願する。村の入り口に独特の形の石と木があり、土地神として祀る。石の形は人形（ひとがた）であり、虎に食べられないように祈願する。この地域の人々は人食い虎を恐れていて、実際に被害も出ているという。石家の土地神も木の根元に祀られていて線香と紙銭が供えられていた。山神土地ともいい、山の神とも混淆している。端節には早朝から石姓の人々が祈願にきていた。日常では子供が病気になった時に祈願する。この日は背後にある守護神を祀った土地神の祠にも参拝する。ここも山の神だという人もいて端節には必ず参拝する。[24] 祠は石家のものだが、よその家の者も春節と端節を拝みにくるといい、この日も線香と酒と紙銭が供えられていた。

この村では競馬（賽馬（サイマー））の行事は一〇〇年程前までは行っていたという伝承がある。競馬をする出発点に井戸があって龍が住んでおり、龍が銅鼓の音を嫌って競馬の道を再三にわたって壊したので中止したのだという。金属は水界にとって相容れないという禁忌があるようだ。馬と龍、そして水は関連があり、馬は山に住む神馬という伝承がある。[25] 龍と馬は同一視されて龍馬とみなされる

こともある。この村には風水をみる水書先生が二～三人いて、風水の良い所には善い龍、悪い所には悪い龍がいると判断し、この井戸は良い龍だったのだと伝えている。馬の走る道は龍脈を選んで決定するので、悪い場所とは何かの差し障りがあったのかもしれない。水書先生は独自の文字によって書かれた『水書』に通じた宗教的職能者である。『水書』の文字は四〇〇余りで、水書先生が使うだけで日常生活では使用しない。象形、指事、会意、仮借など様々な原理で作られていて、明代の墓碑まで遡る［《水族民俗探幽》編集委員会　一九九二：二五八～二七一二六］[26]。水書先生は毎年、収穫後の吉日を選んで、稲と水書を祭壇に置いて、豚と酒と飯を捧げて拝む。この時は祭文を読んで水書の創始者で祖先ともされる「陸鐸」（ルートゥオ）神を祀る（図5）。

水書先生は『水書』に基づいて様々な教示をする。現地での話をまとめると、①風水をみること、②病気直し、③結婚など縁談をみる、④葬式の日取りを決める、⑤建築・祭祀の日取りを決める、⑥祭りの日を決めるなどである。水書先生は基本的には世襲であるが、師匠に習って修行して認められてなる者も少数いる。水書先生は人生儀礼に大きく関与するだけでなく、農耕の作業日（鋤

図5　水書先生の祖先祭祀

起こし、種まき、田植え）も決定する。個人の願い事、病気直し、子授け、災害の予知（山崩れ、洪水、大風）、悪い兆しや異常時の吉凶判断（蛇との出会い、虎の叫び声、鼠の騒動、蛇の抜け殻をみる）をするという。個人の願い事に対応する宗教的職能者で、共同体全体には関わらないが、水書先生と巫師（shaman）の機能は重なっている。水書先生の権威であった王品魁氏（三都県政治協商会議副主席）[27]の説明では風水先生とは重なるが、巫師は学識の程度が低いという。[28]ただし、水書先生は、託宣を行い、占いをして、時には病人の体に取り憑いてる魔物を特定して追い出すという悪霊祓いも行う。また、通常の水書は「白書」というが、これとは別に「黒書」（leman ルマン）があって、呪いのかけ方など相手を攻撃する呪法も書かれていて、実践すれば意図的に呪いをかける「邪術師」（sorcerer）とも言える。[29]

水書先生は大きな祭祀を主宰する役は果たさない。水族は六年か一三年に一度各村が連合して霞節（シャージエ）あるいは、敬霞節拝や霞と呼ばれる大きな祭祀を行う。水語ではフェシャー（feca）やティンシャー（tinca）という雨乞いの行事を行う。シャー（霞）とは水語で「水神」の意味で、秘密の場所に隠してある石を動かして雨を呼ぶ行事を行う。この場合は水書先生ではなく寨老が主宰したという。霞節は最近では近くの木息村で一三年目に一度の行事として一九九〇年六月に行われた。通常は水族の暦の一〇月（陰暦六月）頃に行われる。[30]石は雨乞いに効力を発揮するという。水族は巨石や奇岩を崇拝する習俗が強い。苗族が一三年に一回行う大規模な祖先祭祀のノンニュウ（鼓蔵節）は楓香樹という樹木の崇拝を基盤にしているが、形式は類似しても内容は異なる。しかし長い定期的な循環によって社会秩序を再構築する長期波動が組み込まれた社会であったことは確かである。水書先生の権威が高く巫師の機能も一部は包摂する。巨石や変わった形の石の信仰が根強い。寨老は婚姻や葬制や年中行事など、世俗の紛争処理や調整と同様に様々な場面で重要な役割を果たす。

一一月一九日に訪問した中和郷把妙寨（戸数一〇〇、人口七〇〇）では村の中央に見事な石が祀られていた。[31]子授けを巨石に祈る信仰があり、その脇に先端に刻み目を入れた長い棒を立て、上部に四方形の木の枠を付けて、そこに長・福・貴・平、あるいは佑・保・平・安の文字を書いて祈願する（図6）。水族が立派な石造りの墓を造ることは漢族の影響と考えられるが、石への信仰に支

えられている。墓を巨大にして凝った造形を作ることも石の信仰に支えられて世界観を表現している。[32] 三都の県城から南に二三キロの引朗寨の後方にある石板墓は道光己酉年（一八四九）、咸豊辛酉年（一八六一）の年号が入った墓があり、ある墓には真ん中に瓢箪を描き、左側上段に草・人物・銅鼓・刀・槍、左側下段に麒麟と水牛、右側上段に人物と樹木、右手下段に人面獅子が描かれていた。荔波の町から一七キロの荔波県玉屏区時来郷水浦村の板本寨の石板墓には明末に遡る画像入りの墓石が多数彫刻され、上部の屋根は魚の尾の形になっていて、壁面には龍が描かれ、死後の世界と水界との繋がりがよくわかる（図7）。水辺の土地はかつて祖先が暮らしていた故里であり、源郷回帰の意識が濃厚に滲み出ている。墓は死者の世界と生者の世界の空間的な境界であり多義的を帯びる。

図6　巨石に子授けを祈る

八　墓と犬と雷

村の入口には邑の開拓者の石氏の古い墓があり、道光年間の建造と伝えられ、この地に来た始祖以来のものだという。水族の墓は大きな石造りで知られ、その造形も

図7　魚や龍を造形した墓

見事であるが、石氏の墓石は彫り物が素晴らしかった。両脇には紋様が刻まれており、左手端に雷神、右手端には鳳凰が描かれ、墓石の左右上に龍頭が出ている。雷神は太陽紋のような円の中に描かれ、手足と翼をもつ鶏で、[33]この世とあの世を結びつける。百田弥栄子はこうした考えをオンドリが雷神（雷公）と合体した「オンドリ雷神」として把握して中国南部の各地の事例を紹介しているが［百田　一九九九：九二～一〇〇］、鶏としてあの世に霊魂を導く機能も持つとすれば墓石の造形としてはふさわしい。[34]ただし、雷神は鶏を好むという所と、[35]他方で、鶏や塩を嫌うという禁忌もあり単純化はできない。[36]墓石の右下に描かれた人間は八仙女の一人とされ、漢族の影響が色濃い。水族の墓石には漢族の考え方が混入している。一方、中央部は三部分に分かれて左から右へ鶏・陰陽（太極）・動物と獅子が描かれ、上部には天の犬が三匹いて中央は月を食べている図柄が描かれている。黔南の水族にはムカデが月を咬むという話が伝わる。また、犬が月蝕や日蝕を起こす話は貴州省では水族の他に黔南では白褲瑤に伝わっている。[37]犬については多様な伝承があり、特に雨乞いの時に村内をひっぱりまわすとか犬を打つという儀礼がおこなわれる。調査時に黄長和氏（荔波県専史弁公室。布依族）は、雨乞いについて「貴州省の布依族に、犬の手足をしばり、二人でかついで村を一周する習俗がある。広西壮族、そして黎族にもある」と答えた。[38]また、犬が畑を耕していると太陽がたくさんのぼってきて暑くて仕方がない。犬の盤瓠がワンワンと吠えて天上の雷を誘き出した。雷は地上に降りて来てヤオ族の人々に捕まった。すきを見て逃げ出して大洪水を引き起こした話も伝わる。李寿華氏（苗族。民族事務委員会。五三歳）は「解放前、私が八歳のころ、見たことがある。柳の枝を犬の形に編んで、一人の男が肩に背負って村々を回る。その後を、銅鑼や鉦を叩いたりする鼓笛隊が一〇人ほど続く。人々はその犬めがけて水を（手ではじくようにして）かける。村を回り終えた頃には、柳の枝の犬は原型をとどめていない」［百田　一九九九：一八四～一八五］と述べて犬を象徴的にいたぶることで雨乞いを祈願したという。[39]犬は雨乞いだけでなく、穀物を天上から盗んで地上にもたらしたり、鋼鉄の体を持っていて日月をかじったり、鍛冶を始めるなど、犬祖神話に止まらず、特別な霊力を持つ霊獣とされている。

雷神は大洪水を引き起こして人類を危機に陥れたと創世神話で語られ、洪水を生き延びた兄と妹が近親婚で結

ばれて、その子孫が自分たちだという伝承は、貴州・雲南・湖南の苗族や瑤族などを中心に広く語られていた［百田　二〇〇四：一一三～一七八］。一九八八年三月に訪問した広西大瑤山金秀瑤族自治県での六拉村奮戦屯では実際に村人から「雷王」の話として洪水神話をきいたことがあり、記録も残る［百田　一九九九：一〇一～一〇三］。水族は苗族や瑤族とは系統や言語が異なるが、雷神の伝承は共通している。先祖や霊界とのつながりを地域に広範に伝わる神話世界に遡って記憶にとどめようとしたのかもしれない。

九　霊界との繋がり

水昂村の端節には都柳江流域の都江の近くの村から銅鼓舞が奉納される予定になっていたが、悪天候で来られなくなってしまった。銅鼓舞は銅鼓に合わせて、鶏の羽毛をつけたスカート状の下衣を身にまとう二～四人の男性が一緒になって舞う。水族が受け継いできた独自の舞である。今はこの舞をできる人は風柳村、拉攢郷董俗村、交徳村、甲雄郷塔石村など少数になり、住んでいる所も都江から二〇から三〇キロの山の中に位置する。都江の水族の他、この近くの丹寨の東南に住む苗族が同様の舞を伝えていて葬式にも舞うという。苗族は鶏が霊魂をあの世に運ぶ、あるいは祖先の住んでいた土地に送り届けると信じており、水族と苗族に共に共通する考え方かもしれない。銅鼓の紋様は音と一体になってあの世と交流する。音は死者の魂をあの世に導く、特に「山」や「洞窟」に送り出す時に強い力を発揮する。銅鼓は考古学の成果に基づけば、紀元前四～五世紀に遡る青銅器で[40]、貯貝器や祭具であり、王権の権威の象徴となり、太陽紋・雲雷紋・飛鳥紋などの紋様で世界観を表出する。雲南の石寨山から出土した銅鼓には、船にのった「鳥人」が描かれ、死者を霊界に送る様相を描いたと考えられる。人身供犠の状況を造形した銅鼓も発掘されている。現在の民俗との対応は時空を越えるので難しいが、鳥が霊魂をあの世に運ぶという信仰は現在も苗族には顕著であり、水族の鳥人の銅鼓舞も同じ信仰基盤に支えられていたのであろう。銅鼓は民族や地域によって使用法が異なり、葬儀、祝い事、祭りから娯楽まで幅広い。

船や馬などの乗り物は霊魂の運搬具として意味付けられやすい。水昂村からあまり離れていない荔波県瑤麓の青瑤は死者の棺を船に似せて造り、その上に魚の造形を付けて洞窟に入れて風葬にする。かつては銅鼓を二日か

ら三日打ち鳴らしてから、棺を担いで洞窟に行ったという。九阡出身の石国義氏によれば、死者の霊魂は龍に乗って海に行くと信じており、かつて祖先が生活していたという海のそばか河の近くが原郷として意識されているのだという。水族の重視する馬は龍と同一視され水に関連が深く、原郷回帰の意識は強い。水族は海の近くの源郷への憧憬と、暮らしを営む現在の土地での山の信仰を結びつけて、独自の祖先祭祀を作り上げてきた。地域による差異があるものの、総じて水族は水との繋がりを強く持ち、魚や龍や馬などと霊界との関わりを強調する。他方、大地には龍脈が走っていて、龍の身体とみなし、馬を龍と同一視する龍馬の観念もある。龍が馬に姿を借りて龍脈をたどることは究極的には山頂に至る。山は水の源泉で、水神の龍が大地を走る。龍は馬を介して山神に結びつく。水は実り豊かな大地の形成には欠かせない。龍は銅鼓とも結びつく。銅鼓が蔵の中で保存されている時に、洪水を引き起こす悪い龍と戦って勝ったという。また、銅鼓が龍に変わるという伝説もあり、「龍の銅鼓」と呼ばれている。「虎の銅鼓」もあって虎の吠え声の音を出すので虎が来なくなるという。[41] 銅鼓は何世代にも亘って家が保持してきたもので、もし売り払ったりするとたちまちのうちに落ちぶれてしまうという伝承もある。銅鼓は生命体であり、様々な変身をする能力を持つ。

端節の終わりにお土産として、糯米を粽風に葉に包み、三角形の糯米の包みを垂らして、中央から糸で赤く塗った卵をさげるという縁起物を頂いた。これには新たな再生を祈る意図が籠められているようである。端節を中心に銅鼓、魚、馬、鶏、墓、石など水族の世界観を表す幾つかの象徴を紹介してきた。そこから浮かび上がってくるのは周囲の諸民族との意味付けに共通性があるにもかかわらず、独特の意味付けを施して、霊界との結び付きを維持しようとする想像力である。

一〇　水族の婚姻

三都に戻ってから水族の婚姻と葬制について、石国義氏（水族。三都民族研究所副所長）を中心に聞き書きをした。[42] 以下はその時の婚姻に関する概要である。結婚に至る過程は、問親、定婚、飲酒の三段階から構成されるという。男女の双方がお互いに気に入ればその意志を両親に知らせる。交渉がうまくいかない時は寨老に相談する。娘の結婚相手としては母の兄弟の息子が優先されているので「母の兄弟」の了解を取る必要もある。万事が

うまくいくとなれば仲人を頼んで、男性側が砂糖と煙草の葉、銀の首飾りを持って女性の家に行く。最初は贈り物は拒否される。仲人が女性側の親を説得して別の日に贈り物をする。受け取ると女性側の受諾の意志となり第一段階の「問親」が終わる。男性の両親と叔父叔母、親戚は子豚、糸、肉、砂糖、糯米飯、煙草、銀の首飾り、銀の腕飾りを持って女性の家に行く。賛意が得られれば子豚を殺して共食する。二人の関係は公開され、祭りや市では相互の家の訪問も出来る。女性側の両親が全て賛成して第二段階の「定婚」が終わる。次に男性側は大きな豚（二〇〇キロ）と何匹かの子豚、銀（五〇両）、ニワトリを女性側に贈る。女性側の父の兄弟にニワトリと豚を贈る。女性側から見ているととても賑やかに見える。女性側は親戚や村人を呼んで肉と酒でもてなす。女性が幸せになるようにと願う。昔は女の子が生まれると酒を用意して土の中に埋めて発酵させておきこの時に出してもてなした（媟子酒）。花嫁が生まれた時からこれまで開けたことがない酒である。双方から二人ずつ男女の代表が出て、四つのどんぶりで酒を飲ませあう。酒を飲むと結婚の証人になったことになる。これで第三段階の「飲酒」は終わる。

次は第四段階の「接親」である。男性側と女性側から男女二人ずつ総計で四人が選ばれて相互の家族の調整役となる。彼らはフイティン（輝定）と呼ばれ、嫁を出迎える人の意味で、歌と踊りが上手な人を選ぶ。四人は男性側の家から先導役の女性と一緒に出発して女性側の家に向かう。この時は肉・酒・魚、そして魚を捕獲する「魚筌」と、魚に似た葉「金網籐葉」を六枚持参する（この葉は四人がとってくる）。先祖は源郷で魚をとって暮らしていたので、魚を通じて先祖のことを忘れないという記憶を確認する意味だという。四人は女性側の家の中で掛け合いの対歌をして、夜から朝までうたい続ける。この時は二〇〇人くらいが集まって来て周囲を取り巻くが、花嫁は隠れていて出てこない。対歌は質問形式で、難問に答えられないと罰則として鍋墨を顔につけられる。

花嫁は朝方に盛装して昼時に花婿の家に出発する。花嫁は出発にあたって紙で作った傘を差し掛けられる。家を出てから、すぐに傘をやぶって破れ傘にして持っていく。これは花婿の家に行く途中で受けるかもしれない雷や鬼の攻撃を防ぐためである。途中で雷に会ったら花嫁は花婿の家について以後、一三日間は家の中にいて自分の実家には戻れない。その日が「卯日」であれば次の

「卯日」までである。この間に花婿は水書先生に頼んで、鬼や雷が出て行って下さいと祈願してもらう。つまり、雷や鬼に会うことは憑依されたと考えているのである。行列は迎えに来た五人（四人と先導役の女性）が先頭に立ち、村人が続くので総勢で一〇〇人となる。花婿の家の入口に到着すると魔よけの巴茅草を持って花嫁の後ろからお祓いをしつつ中へ進む。この時、家の中に誰も居てはならない。ただし、これは昔のやり方で、現在は傘を持っていれば憑りつかれないとされている。花嫁と花婿に続いて、男性側の年寄りが中へ入り、親戚を招き入れる。二人は炉の周囲を巡る。炉には祖先の霊が宿るので、新たな生活にあたって敬意を表し、報告するのである。新郎の両親も中へ入る。花嫁は炉の周囲を巡った後は、花婿の部屋に入って出てこない。花婿と花嫁は家の中では顔をあわせない。夜は掛け合い歌が堂屋で始まり、御飯を食べ酒を飲み、翌日まで続く。ここには村人も招かれるので別の若者が知り合う機会になる。早朝になると、花嫁は部屋から出て御飯を食べて実家に戻る。この時は仲介役の五人が付き添う。花嫁は実家で普段着に着替える。午後になると花嫁は花婿の家に戻り、台所に入って家事を開始して夜から一緒に暮らし始める。

一一　水族の葬制

葬制については以下の通りである。人が亡くなるとその息子は母の兄弟に知らせ、次いで全家族にも知らせる。これ以後、しばらくの間、肉類と脂物を食べることは禁忌となる。酒も一切飲まない。母の兄弟がきて死体を見て確認してから「寿衣」を着せて棺に入れる。祖先棚の前に据える。水書先生を呼んで葬式の日の日取り決める。早い時で二日から三日、遅いと七日間死体を家におくこともある。[43] 死者の供養のために「孝歌」が家の外で歌われる。歌の専門家がいて外から呼んでくるのが恒例で、最近は民間の人気歌手に頼む。「孝歌」は翌日の朝まで続く。親戚は米と酒を持ってくる。

母の兄弟は弔問に際して紙で作った傘を持参する。死者の息子は跪いて拝むので、母の兄弟が立ち上がらせる。夜間は花灯の劇をする（漢族の習慣）。演じ手は村人で、悲しみの気持ちを表わす。家の中では棺の前に魚・酒を供えて、母の兄弟を招いて家祭をする。家族は祖先棚に置いた死者の霊位を拝んで追悼する。息子が自分の親を追悼する祭文を書き、寨老に読んでもらう。息子は涙を流す。祭文読みが終了すると、親戚や友人が「祭帳」を

持ってくる。母の兄弟が最初に贈る。六尺から七尺の白い紙で贈呈者の名前が書いてある。一人一枚ずつで三〇〇から四〇〇にもなる。少ない人でも五〇くらいはもらう。部屋の中に掛けておき、翌朝、墓所に埋めに行く時に持参する。全ての追悼の儀礼は前日の夜までで済ます。

朝早く出発して埋めに行く。棺が家を出る時は、家の中で巫師による儀礼が始まる。黒い鍋を頭の上にかぶり、アヒルを一匹もって棺の周囲を回る。この時の唱え語は、海の龍たちよ、ここにきてこの人たちを保護してくださいという火事にならないようにする祈願である。木造建築が多い水族の村では火事が一番こわいが、龍王が来ると火事が起こらないと信じられている。この時の巫師は水書先生が務める。棺を置いた堂屋の隣に特別にきれいな部屋をしつらえて、巫師が助手を六人ほど使って儀礼を執行する。神壇に魚・糯米飯・豆腐を供えて、「陸鐸神」の祭りを行う。「陸鐸」とは水語のルートゥオの当て字で、水族が信頼する独自の神で六体からなる。陸鐸神とは水書の伝説的な創始者[44]で、水書先生は自分の究極の祖先を祀って助力を得ることで死者を無事にあの世に送り届けようとしていたのだ。唱え語をして特定の方向を拝む。神送りの後、神壇を壊して儀礼は終了する。

早朝、占いで決めた墓に向かう時間になると、爆竹を鳴らし、棺が家族の人々に担がれて墓に向かう。子供たちは母の兄弟が贈った紙の傘と祭帳を持って先頭に立つ。祭帳は竿の上つけてはためかす。先頭は子供たち、紙の傘の後方に棺が続き、蘆笙[45]と哨吶[46]の音が先導する。全ての親戚と友人がついていく。息子は棺の先に立って、杖を一本持ち亡くなった死者の霊位を運ぶ。隣にお供の人がついていく。霊位を持つと杖が持てず、杖を持つと霊位を持てない。棺の上に長い布をかけ、息子の奥さんと孫はその布を握って一緒についていく。墓に到着すると、埋葬する所の上部は布で覆われてテントのようになっている。これを布蓬（帳蓬）という。そばには霊塔が置かれていてその中に棺を置く。別働隊が土を掘り返していて、墓穴ができると人々が家族を手伝って、棺を穴の中に入れて土中に埋める。傘を墓の上に差し掛ける。土の中に埋める時に再び蘆笙と哨吶を吹く。昔は銅鼓を叩いたが現在は使わないことが多い。石の棺を先に入れ、その中に木の棺を入れる。死体は木の棺の中に入れる。上部には大きな石の板を立てかけておく。これで一人で一つの墓が出来る。この形式は「石板墓」で昔のやり方である。現在は「圓墓」が普及してきた。これは宮廷圓墓

の略で丸い墓で死者の家を表わす。漢族の宮廷の城をかたどるともいう。墓から帰ってくると、葬列に参加した人々は、祖先棚に供えて置いたお椀の水を飲む。清めの意味でこれ以後は精進が解けて肉を食べることが許される。死者への供犠として、男性の場合は馬を一匹、女性の場合は豚を一匹供犠する。供犠は葬列が出た後の埋葬前に家の外で行う。馬と豚の肉は全てが終わった後に、家族と親戚が集まって家の中で食べる。

埋葬後、三日目に家族は母の兄弟と親戚と共に墓へいく。墓前でニワトリと豚を供犠する。家に戻って来て、葬式の期間に手伝ってくれた人に対して感謝して一緒に食事をする。母の兄弟は家に帰る。死者の息子はお酒と、葬式当日に供犠した馬の頭を持って、母の兄弟の家に持って行く。巫師にも馬の腿肉を贈る。春の四月の墓参りである清明節に先立って、三月に水族独自の祖先祭り「掛社節」を行い死者を供養する。「掛」とは水語の「クワ」の当て字で祖先の意味である。豚を供犠して、墓の上に細長い白紙を掛ける。母の兄弟はこなくてもよい。清明節には漢族風の墓参り「添坟」を行う。

死後も死者を祀る霊堂（香亭）を作り[47]、朝と晩は線香と御飯を供えて三年間継続する。服喪の期間である。死後三年を経過すると、水書先生に頼んで日取りを選んでもらい、葬式の時に作成した、死者の事績を漢文で書いてある「祭文」と、家屋の入口の両側に貼っておいた白い「対聯」を焼く。これを漢語で「除孝」といい、これ以後、対聯を赤紙に張り替える。喪明けの儀礼である。祭文の焼却にあたっては「母の兄弟」が必ず来ることになっている。死者の霊魂は死後三年を経過すると家の守護神になるといわれる[48]。水族と漢族の習慣が混淆し再解釈が施されている。

水族の葬制では魚が供物として重視され、馬の供犠が行われて、魚と馬が重要な役割を果たす。そして死後には水族の守護神で水書の創始者のルートゥオ（陸鐸）を拝む。墓参りも漢族とは異なる方式で行うが微妙に習俗が混淆して三年間の喪に服した後に家の守護神になる。水族は他の民族と比べて独自の慣行を維持してきた。他の民族、特に苗族との共通性は社会的には「母の兄弟」が重要な役割を担当し、家長に次ぐ大きな役割を与えられていること、宗教的には銅鼓の音を通して霊界との交流を図ること、一三年といった大きな循環サイクルで社会を再構築する長期波動を組み込んでいることなどであろう。水族は平地の壮（チワン）・傣（タイ）族系の文化と山地の苗（ミャオ）・瑤（ヤオ）・

布依（ブイ）族系の文化の交錯する貴州の一角で、漢族の文化も巧みに取り込んだ混淆文化を生み出しており、人口は少ないが独自に生きていく道を模索する人々である。

一二　民族文化の行方

本稿は水族の民族文化について、祭祀や葬制や婚姻に関して考察してきた。そのうちでも、水族の端節・銅鼓・水書に関しては、主観的判断が混じるが、他の民族と比較して独自性がある「民族文化」と言えるかもしれない。水族は人口が少ないので、積極的に他の民族とは異なる特徴を持つことを強調する傾向がある。特に水書は独自とされ、二〇〇六年に国務院から「第一批　国家級非物質文化遺産」の「水書習俗」として登録されて、文化遺産として保護されることになった［潘朝霖　二〇〇九：三四九～三五六］。湖南省江永県の「女書習俗」と同時登録で、民間に伝わる独自の文字としての評価である。西南中国の少数民族で独自の文字を持っているのは、水族の他に彝族（イ yi）、納西族（ナシ nashi）、傣族（タイ dai）であり、水族の人口はこれらの民族に比べて遥かに少ないにも拘わらず、独自の文字を持つことで注目を集めた。古代の越系の文化に遡る「生きた化石」の古い文字という評価も出現した。黔南民族師範学院は二〇〇五年四月に「水族文化研究中心」を、貴州民族学院は「水書文化研究院」を創設し調査研究の中核拠点として共同して作業を展開している。二〇〇六年からは一三五三本の水書の手書き本の影印をとって『中国水書』全一六〇巻の刊行を行った［羅春寒　二〇〇九：二九一］。現在はインターネットによる成果の紹介も盛んである。水族が自らの独自性を水書を通じて主張する時代が到来し、多数の討論会や出版事業が行われ、藝術活動にも水書の文字が活用されるようになった。しかし、水書は極めて限定された人々が読み書きできる特殊な文字であり、秘儀性を帯びた神霊との交流の手段であった。現在では「文化の資源化」によって水書は大きな変貌を遂げた。ただし、水族にとっては水書だけが文化資源ではない。端節も二〇〇六年に「第一批　国家級非物質文化遺産」に登録された。そして、幾つかの村々は観光用に民族村として活用されるようになり、今後は民族文化が大きく変貌することが予想される。

「文化」の概念は曖昧である。中国語の「文化」は文献上では漢代の劉向の『説苑』の用例がよく引かれるが、天下の民を教化する手段の意味で、その後も影響を大き

く及ぼした。これに対して、現代社会の「文化」は明らかに英語のcultureの翻訳で、中国では日本語の翻訳を取り入れた可能性もある。文化人類学の「文化」概念とは異なり、科学性や普遍性を強調して「文明」に近いニュアンスもある［長谷　二〇〇七：一〇三］。本稿で使用した「民族文化」という概念も実は曖昧さを逃れられない。本稿では「文化」は文化人類学の「意味と象徴の体系」、文化相対主義の「文化」の定義というよりも、広い意味の「生活様式」と考えて、水族の文脈に合わせて、「創られた民族」が自らは何者なのかを問う枠組みとして使用してきた。その意味では学術用語と政治用語と民俗語彙が微妙に入り混じっている。「文化」は文脈に応じて意味や内容を変え、生成と変化を通じて持続する。現代は「文化」の用語を使って様々な表現や実践が繰り広げられているが、文化要素として分解せずに、一旦は元の文脈に戻して、歴史的変遷を考慮した上で考察するべきであろう。水族、貴州省、中国という文脈の多層的な交錯を丹念に解きほぐすことが望まれる。

貴州省は二〇〇〇年代以降は、高速道路の発達で、村々までの到達も容易になった。そして、二〇一四年一二月二六日、貴州省の貴陽と沿岸部の広東省の広州を結ぶ高速鉄道が開通し、四時間で結ばれることになった。かつて辺境地帯とされた貴州省に大きな変化がおとずれている。今後は水族を初めとして、各民族がどのように文化資源を活用していくか、その生き方が問われる。

【謝辞】

水族の調査と研究にあたっては、范禹先生（黔南文学芸術研究室）と潘朝霖先生（貴州民族学院）のご教示に負うことが大きい。長年にわたる学恩に感謝申し上げたい。

註

（1）一九八二年の人口統計では全国では二八万六四八七人で、貴州省は二七万四七〇〇人、主な居住地は黔南に三都水族自治県に一四万〇九九八人で、全県総人口の六〇・八％を占めていた［三都水族自治県志編纂委員会（編）一九九二：一四三］。その後かなりの増加があったが、これは少数民族の優遇策に伴い漢族からの帰属変更が増えたためである。なお、本稿は一九九〇年の調査当時の記録［鈴木　一九九二］とその後の収集資料に基づいている。

（2）水族に関する研究は一九五〇年代の状況については潘一志の内部資料［潘　一志（編）一九八一］が優れている。後に［貴州民族学院・貴州水書文化研究院（編）二〇〇九］として再編集されたが、内容に改変が加えられ

た。一九九〇年代までの調査の集大成としては、［潘朝霖・韋宗林（主編）　二〇〇四］があり、代表的な論文は［潘朝霖・唐建榮（主編）　二〇〇九］に収録されている。

（3）　侗族の最近の状況については、［鈴木　二〇一一］を参照されたい。

（4）　人類起源神話や移動の伝説、文学の概況などについては［范禹（主編）　一九八七］を参照されたい。

（5）　水族の文献上の初出は明代の王陽明（王守仁）『月潭寺公館記』に記す「俅」、鄺露『赤雅』（一七世紀）が記す「俅」に遡るというが［《水族簡史》編写組　一九八五：六］、確証はない。

（6）　暦日については様々の暦の変遷と混在が推定されている。地元の研究者の説では、宋代までの暦は無閏水暦で一年が三六〇日でずれが生じ、明代には是正した新水暦が作られた。新水暦は三五四日を一年とし、一九年間に七つの閏月を九月の後の十月に置く。新水暦では陰暦の九月が水暦の一月なので、八月に水稲稲作では穀物を収穫した後に年変わりで、端節はこの時期に行われるという［韋忠仕　一九九一：四五～四八］。

（7）　端節の概況は［《水族民俗探幽》編集委員会　一九九二：二八一～二八八］に詳しい。

（8）　銅鼓舞、闘牛舞、蘆笙舞も行われる。蘆笙舞は苗族の影響があり鳥の衣を身に着ける。羽毛で飾ったスカートをはいて舞う。都江近くの苗族の男性の舞と同じである［鈴木　二〇一二：一八四］。

（9）　端節は水語でチェトゥワ（tsje twa）で、漢字では「借端」にあてる。「端」の音と「瓜」の音が近いので「瓜節」になったという説もある。カボチャ（南瓜）を供えるので「瓜節」と俗称するともいう。

（10）　死後三年間は朝と晩に線香を灯して拝み、三年後に喪明けの儀礼を行って廃棄する。

（11）　文献上では『八寨県誌』に「一人執槌力撃、一人以木桶合之、一撃一合、故声洪而応遠」と記載がある。

（12）　三二四個の内訳は、九阡に三七、周賈に九一、水龍に七八、都江に七八、城関一八、大河に五、普安に六、城美鎮に一で、このうち苗族は二〇、布依族は六、文化館一で、その他は全て水族である。文化大革命の時期に故老が地面に埋めて所在がわからなくなったという話も伝わっている。

（13）　広西壮族自治区の南丹県に住む白褲瑤も播種から収穫までの農作業の時期には叩いてはいけないという禁忌を伝える［鈴木　一九九五］。

（14）　端節に関わって悪龍を退治する銅鼓の伝承が伝えられている。「昔むかしのこと。秋の取り入れがすんで端節が近づいた。村人たちは村はずれに立つ榕樹の太い枝に、大きな銅鼓を吊るした。大晦日、あたりの村々から若者や老人たち男ばかりがやって来た。女たちはまだそれぞれの家で、端節のしたくに追われている。端節の朝、突然村の前を流れる川に悪龍が現れて、大水を出した。川にたった一本かかる石橋はたちまち水の下に沈み、女たちは橋を渡って来られなくなった。次の日、川の方で山々を揺るがすような音がした。村人たちがかけつける

と悪龍と丸い物が組んずほぐれつ闘っている。どれほどの時間、闘いが続いたことか。丸い物はいきなりさーと天高く昇って行った、と思う間もなく、悪龍めがけて勢いよく落下した。悪龍はすさまじい悲鳴を残して姿を消した。川面はみる間に静かになって、丸い物もどこかに消えた。天は晴れ上がり、石橋が水面に現れた。その向こうから、女たちの笑いさざめく声が伝わってくる。村人たちは歓迎の銅鼓を叩こうと、村はずれの榕樹の方へすっとんだ。見ると、綱が切れ、銅鼓はびっしょりぬれて地面にころがっている。悪龍を退治したあの丸い物はこの銅鼓だったと、村人たちは悟った。その年の端節は、いつもの年にも増してにぎやかだった。」［百田　一九九一a：二〇～二一］。

（15）銅鼓に造形される蛙は雷神の息子だという伝承が壮族に伝わっている［大橋・松平　一九九二：二五八］。広西壮族自治区の紅河流域の東蘭や鳳山一帯のチワンは春節の間、螞拐（マークワイ）節を行う。マークワイは壮語（ムーラオ語ともいう）で蛙祭りの意味である。蛙を供犠して銅鼓を叩いて一二日間供養し最後の日に葬儀を行って埋葬し、前年の蛙の骨を掘り出して占いをする。子孫繁栄と作物の豊穣祈願を蛙を通して雷神に願うのである。雷神の息子が蛙だからという。一方、蛙を土地神や山神の息子という説も流布している［覃剣萍　一九八八：七一。大橋・松平　一九九二］。

（16）湖南省の苗族が神判の場で唱える「理詞」では射日神話が語られている。天神（雷神）の天地開闢ののち、二四個の日月が出て大地は焼け焦がれたので、二人の神が弓矢を作って射たので真っ暗闇になった。一日一月は岩洞に身を隠した。そこで「月はオンドリの母方オバ、日はオンドリの母方オジ、オンドリに日月を呼び出してもらう」という（『楚風』一九八三年第一期）。

（17）堂屋の隅には笹竹が立てかけてあり、家族の健康を守る神を祀る。特に年寄が長生きするように祈願を籠めるという。繁原央の調査では漢語で「福高壽」、水語でフーミン（fu ming）という。これは、一二月丑日（水暦四月）に馬上の牙花散（漢語では生母娘娘）が人間界に子どもを恵む水族の祭り「娘娘節」、水語は蘇稔喜節（蘇寧喜節）の時に、水書先生に来てもらって作る［繁原　二〇〇四：三一三］。竹は節が沢山あるので寿命が長くなるように祈る。首飾りを新調して身に着け魔物よけの護符とする。病気はしばしば悪霊の憑依で起こるからである。身体が不調になると再度行い、併せて首飾りを新調する。竹は水族にとって特別な意味を持つ。黔東南の苗族も同様で、長い竹と短い竹を堂屋の中柱の前に建て健康を守る「花樹」「保命竹」とする。苗語はデシナン（det xix nang）である。

（18）銀匠に腕輪を竹筒の形にするように頼むのは、山に住んで悪さをする山姥が竹筒をとって逃げるからだという伝承もある「戴手鐲的来歴」［祖岱年・周隆淵（編）一九八四：九四～九五］。竹の持つ魔よけの効果を示す伝承である。

（19）一九九八年に村の社会調査が行われ記録が公刊されて

いる［石国義・韋仕通・石昌安　二〇〇七：二五六～二八九］が、家族親族の調査が中心である。

(20) 卯節は作物の成長期に合わせた年変わりで、焼畑の収穫との関連もあるかもしれない。卯節の起源や実態については［《水族民俗探幽》編集委員会　一九九二：二八九～二九一］に詳しい。一九九三年八月一四日（旧暦六月六日）に九阡鎮水各郷大寨で行われた卯節については、［繁原　二〇〇四：三二〇～三二一］の記録がある。

(21) 蘇寧喜節は、「四月丑日」の意味で、女神のニーハン（尼杭 nihang）が子授けをするという［《水族民俗探幽》編集委員会　一九九二：二九一～二九三］。四月とは水暦で陰暦では一二月頃にあたる。女神は漢語では生母娘娘という。なお、ニー（尼 ni）とは水語で母親を意味し、雷もニーガンナ（尼扛娜 nigangna）といい女性である［同　二二九］。

(22) 漢語では蘇稔喜節とも表記する。神話や伝説では牙花散（yahuasan）、牙花離（yahuali）、牙花術（yahuashu）などと同様の子授けの神だという［潘朝霖　一九九一：二八二～二八四］。

(23) 実施地域は、端節は三都、独山、都匀で盛大、卯節は三都、荔波で盛大、荐節は都匀、独山、三都で少数、蘇寧喜節は三都県和勇郷呉姓のみという報告がある［劉之俠・石国義　一九九九：一〇四］。分布状況は概略に留まる。

(24) 年の変わり目の新年に山神を祀ることは他の民族でも共通する。一九九〇年一一月三〇日に三都水族自治県の龍泉鎮の排牙村（苗族）を訪ねた。村の入口には人形の石が五体あり、山神を祀るという。祖先神でもあり三年に一回、苗年に水牛を供犠して祀る。五体の石は五人の祖先でこの村の開拓者であったという。山神と祖先神も融合している。漢語では社王にあたる。

(25) 貴州苗族の伝承「秀咪と紅い鬣の馬」では山に住む馬について語られている。「三人の息子がいる家の畑で、トウモロコシが豊かに実った。ある朝のこと、トウモロコシは馬になぎ倒されていた。長男、次男、それに父がその晩から見張るが、誰も馬を捕えることはできなかった。三男が物陰に隠れてみていると、真夜中、大音響とともに赤い光が走ったかと思うと、向かいの山から馬が駆け下りて来た。三男はおくせず馬の背に跳び乗って、暴れる馬を巧みに乗りこなした。馬は『私はあなたのもの、助けが必要な時には向かいの岩を三度たたいてください』といって去った。ある年、皇帝はこの九階建ての宮殿を馬で跳び越せた者を娘婿にすると布告した。三男は馬を呼び、見事に宮殿を跳び越して婿になった。」［百田　一九九九：二〇〇］。

(26) 最も古い水書は王品魁の見解では、拉下村にある明代の一六世紀の墓碑ではないかという［潘朝霖・韋宗林（主編）　二〇〇四：二五六］。水族研究の第一人者で一九五〇年代に調査を行った潘一志によれば、手書き本は清代の光緒年間（一八七五～一九〇八）以降である［潘一志（編）　一九八一：三八八］。水書は明代の墓碑が古く、清代の嘉慶、道光、同治、光緒年間に最盛期を迎え、民

国年間に多量の手抄本が現われたと考えられる［王品魁　二〇〇九：五九］。中国側の水書研究は一九四三年九月の岑家梧の三都・荔波の調査で始まった。日本人による最初の本格的な研究は［西田　一九八〇］である。

(27) 王品魁氏（一九三二～二〇〇五）は中央民族学院に学んで、三都では県の政治経協商会議副主席を務めたが、晩年は水書研究に打ち込んで重要な水書に関して貴重な訳注を書いた［王品魁（訳注）　一九九四、王品魁・潘朝霖（訳注）　二〇〇五］。一九九〇年にお会いした時に多大の教示を受けた。

(28) 風水先生は主に墓に関わり、水書先生は葬制・婚姻・建築など生活一般に関わるという説明もある。しかし、単純な比較対照はできない。

(29) 『黒書』の内容は悪霊を放ったり収めたり、時には防御する方法などが書いてある。密かに敵対する人物の靴や衣服を取ってきて、誕生日の干支（生辰八字）を知って、『黒書』の方法で悪霊を放つ時間や方向を見定める。靴や衣服を縛り付けて呪いを掛けるという［《水族民俗探幽編集委員会》　一九九二：二六六］。

(30) 霞節については［《水族民俗探幽》編集委員会　一九九二：二九三～二九九］に詳しい。霞節は一九四九年の解放後は「迷信活動」とみなされて事実上禁止されていたが、一部では隠れて行っていた。一九九七年の夏には学術的資料として保存するという観点で、九阡地区の拍撮で霞節が行われ、四川峨眉電影制片廠が撮影班を組織して映像記録を作成した。その内容の一部が紹介されている［潘朝霖・韋宗林（主編）　二〇〇四：五一一～五一三］。

(31) 明代の創設と伝える。端節は旧暦九月九日で銅鼓（ニャウ）を叩いて先祖を祀る。現在は一つしかないが、元は八個ほどあった。銅鼓を叩くときは音を共鳴させるために銅鼓の空口に桶をあてがって共鳴させる。

(32) 中和郷の板廟村にある明代末期とされる古墓はよく知られているが訪問していない。

(33) 鶏が太陽を導き出すという意味あいが籠められている。村々で日々をおくれば、早朝にけたたましく鳴き出す鶏が太陽を先導することは感覚的に受け入れられる。

(34) 雷神と対抗するムカデについては「月を咬むムカデ」（蜈蚣吃月亮）という話が三都水族自治県の水族に伝わる［祖岱年・周隆淵（編）　一九八八：五〇七～五〇八］。「ムカデは子どもたちのために食べ物を探しに岩陰を出たとたん、人に見つかって打たれた。これも月夜のせいだと月を恨んで、ムカデは馬桑樹を上って梢から月に咬みついた。月が悲鳴をあげると、その声に雷神がかけつけてきて、天宮にいたムカデを追った。地上では人々が血に染まった月に気づいて、銅鑼や太鼓をたたき銃を放った。ムカデは必死に馬桑樹をつたって地上に逃れたが、雷神はムカデを見つけて雷を落とした。ムカデは今でも雷が鳴ると、畏れて岩陰に隠れる」［百田　一九九九：一六四］。この話によればムカデは雷神にかなわない。ムカデは山神や土地神とされる。鐘涛は台江県清水江の苗族にはムカデ龍もあると報告している［百田　一九九九：

一七一]。水神の龍とは異なる山神の龍である。龍船のへさきの角は龍もあれば、鶏のトサカの場合もあるとすればオンドリ龍も加わる。雷神は天と地をつなぐので「オンドリ雷神」が龍と習合したともいえる。さらに、湖南省湘西の高村の苗族の先祖は犬で、龍船のへさきに犬の頭を造形していた。このことを「犬は龍に勝つ」とも言う。相互に連関しつつ神話世界は現実の儀礼で再現される。

(35) 雷神が鶏を嫌うことは湖南省湘西の苗族（自称コーション）で語られ、鳳凰県東郷での「洪水伝説」の記録がある［芮逸夫　一九三八］。一九九八年八月に訪問した湘西の鳳凰県都里郷都里での龍金橋氏（六四歳。苗族）の語りでは「この土地では、鏡にはオンドリの絵を描く習慣がある。もしも雷がゴロゴロ鳴っても、雷公はこの鏡のある家には、オンドリを恐れて来ない。でもオンドリの絵が描いてなければ雷は落ちて来るから、急いで裏返しにしなければならない。そうすれば雷公は、鏡にオンドリがいるかどうかわからないから、やっぱり落ちては来ない」［百田　一九九九：二四一～二四二］と述べた。鶏を恐れる雷神の様子が鏡の造形を通じて語られた。

(36) 湖南省の旧乾城県の小龍洞の淵の傍らにある雷公洞（乾洞）の伝説では雷神は鶏と塩を嫌うと伝えていた。「この洞に雷神が住んでいる。雷神は清廉な尊神であり、むかしからずっと鶏とは仇どうしであった。付近の村人はこの雷神を尊敬して、家では決して養鶏しない。養鶏すると雷に打たれるからである。また日照りの年には、村人たちは雷公洞に行って豚や羊を殺して備えて雨乞いする。けれども雷神は塩を憎んでいるので、雷神の怒りに触れぬように、お供え物には決して塩を入れない」［石啓貴　一九八六：四八〇］。一九九八年八月二二日に龍海清氏（中国民間文藝協会）の案内でこの地を訪問した。雷公洞の上部に王岩村（現在は花垣県排碧郷。標高七一〇m）があり、当地の龍成公氏（六六歳。苗族）によれば鶏は飼わないし、塩も禁忌だという。かつて大旱魃に行った「雷神祭祀」は土地廟で執行したが、「日照りが続いて稲やトウモロコシなどが枯れてしまったら、その激しさによっていくつかの村、もしくは郷ほどの単位で寄付をつのり、村ごとに二人ずつ代表を出す。この村の代表は心根の良い人に限る。雷神の好みだからである。村人から選ばれた心のきれいな代表たちは、土地廟に集まって二頭の煮豚を捧げる。その鍋には塩をいれてはいけないので、かわりにトウガラシを入れた。おしゃべりするのは禁忌で、とりわけ〝塩（ヤン）〟といってはいけない。雷神は塩を恐れるからね。剃刀といってもいけない」と語った［百田　一九九九：二四八］。そして、独特の祭具、シュンを持ち出して雨乞いのやり方を教示してくれた。太い竹で長い節の一節を縦に割り、二か所の節の下側に牛の蹄の足をつけて固定化する。上部に竹の繊維にそって細長い孔を二本あけて、横に二弦の弦を張っている。これを木槌で叩いて音を出して念じて雨乞いをした。巫師の役目である。

(37) 白褲瑤の「天の犬を射る」（射天狗）という射日神話

は以下の通りである。「むかし、昼夜が分かれたころのこと。天に現れた黒犬が昼は太陽を、夜は月を咬んであたりを暗くした。この犬はもともとは天の蟠桃園を守る哈蚣（ハコン）という名の役人だったが、腿をもぎに来た天女たちに悪さをしたために天母によって黒犬にされて地上に降ろされ、長者の家の番犬になった。ところがそこでも主人の権勢をかさにきて人々を咬んだから、人々は天母を恨んだ。そこで天母は黒犬を天に戻して天門の番をさせたが、黒犬はこんどは日月に咬みつくしまつ。人々は複数の太陽を射落とした弓の名人の里丹に、天の犬を射て日月を救うようにと頼んだ。里丹は臘巴山に登って犬に向けて矢を射ると犬の尻に三本の矢がささり、犬は痛さで日月を吐き出して天門の隅に隠れた。そこで若者たちは里丹に弓術を学び、犬が日月を咬むと、ただちに臘巴山に登って天の犬に矢を放った」［百田　一九九九b：一七五～一七六］。苗族の創世神話で黔東南の台江県から採集された創世神話では、太陽は雷神（天神）が金を鋳造し、月は銀を鋳造し、日月を噛むには金銀よりも固い歯の持ち主とされ、犬は鋼鉄の体をしているので咬むことができるという［馬学良・今旦（編）　一九八三］。オンドリの招日に続けて、「日月が負傷して、天の犬の家に洗ってもらいに来た。日月はお米を五十斤あげると約束したのに、傷が癒えたら与えなかった。そこで犬は方策の年は稲を食べ、不作の年は日月を食べて飢えを満たした。この日月を食う天の犬は、銀の高炉の底から生まれた。高炉が育てた天の犬には、上下に並ぶ歯があった。だから天の日月を食らうことができるのだ」という。ここでは鍛冶文化と犬の関連も登場する。

(38)　荔波での座談会での発言である（一九九〇年一一月一七日）。

(39)　三都での座談会での発言による（一九九〇年一一月一九日）

(40)　銅鼓が発掘されたことで名高い北ベトナムのドンソン遺跡は一九二四年に発掘されていて、時期的には紀元前四から三世紀と推定されている。銅鼓と稲作を結び付けたり、日本の銅鐸との関連性を説く説があらわれるなど古代史研究者には興味が尽きない。

(41)　虎銅鼓についての伝承も水族に伝わる。「甲仿寨のまわりを人食い虎がうろついている。村人たちは村の門を閉ざしたまま、畑仕事に出られない。村長は虎銅鼓を借りに使いを出し、使いは銅鼓を背に戻って来る。村人たちは銅鼓が虎を食うとは信じられなかったが、村長の家の穀物倉に置く。それから数日、虎は姿を見せず、人畜も無事だった。その日、村長は村人たちといっしょに倉を開けた。銅鼓は根が生えたように動かない。銅鼓の耳に鉄棒を通して、若者数人がかりで担ぎ上げてみると、虎の骨が現れたではないか。銅鼓の内側には虎の毛もいっぱいついている。銅鼓がどうやって虎を食ったかは謎だったが、それ以来、銅鼓は宝物になった。」［百田　一九九一b：二二六］。

(42)　一九九〇年一一月一九日のことで、出席者は石国義の他は、潘永行（水族。貴州省三都民族中学、水族研究家。

三四歳）、潘朝豊（水族。貴州省水家学会。五八歳）、李寿華（苗族。三都県民族事務委員会主任。五三歳）であった。

（43）昔は一年間ということもあったというが、特殊な事例かもしれない。

（44）陸鐸公、洪陸鐸、陸奇公ともいう。伝説によれば、水書は陸鐸公など六人の老人が仙人の所へ文字の勉強にいった。そこでは造字・講書を学び、仙人が水族の獣や鳥や道具の姿を図形化した文字を描かせて水書とした。従って水書には獣や鳥をかたどったものがある。六人は六年間勉強して帰ることになったが、途中で五人が病死し、陸鐸公だけが水書を持って帰ってきた。ところが党（水語で認識不明の人）の悪人に水書を奪われ、一本だけ残った。陸鐸公は文字を記憶していたが、それでも文字は少なくなった。現在は四〇〇文字しかないという。歧任党の妨害を避けるために、左手で書いたので水書の字が横や逆さになったり、画数が少なくなったという。［《水族民俗探幽》編集委員会　一九九二：二五八～二五九］。伝説については［韋章炳　二〇〇七：四七～五六］が詳しい。水書先生は毎年年初めに陸鐸公を祀るという。現在では民間信仰の対象で、九阡地区では春になって雷が落ちた後の第二月に祭祀を行い、農耕儀礼や祖先祭祀と重なっている［《水族民俗探幽》編集委員会　一九九二：二四九～二五〇］。神霊の呼称としてはマン（mang忙）が多い。

（45）苗族が最も愛着を持つ吹奏器で、気室は元々は瓢箪で人類始祖が洪水を乗り切った時に船とされ神話世界と直結している。子宮や母体とも観念され管を挿すことは性交を象徴して豊穣多産が願われる。蘆笙は男性が吹き、女性は舞うことの意味は男女の役割分担と象徴的効果に関連するとみられる。

（46）ダブルリードの管楽器で日本のチャルメラやインドのシャーナイも同系統である。

（47）親が亡くなった後、水書先生に良い日を選んでもらって作る。極楽宮の額を掲げて中に霊位を納める。繁原央が一九九三年に三都県恒豊郷和勇村吉祐寨で見た「香亭」は三階建ての建物で屋根に瓢箪風の飾りをつけ、下部の右に「青都」、左に「紫府」と書いてあった。後ろには「孝祭」（孝祭文か）という白布があり、親が亡くなった時に嫁に行った娘が嫁ぎ先から届けるもので、死者の事績を漢文で書いてあったという［繁原　二〇〇四：三一二～三一三］。

（48）水族は亡父の霊「公忙干」（gongmangan）を一番大切にする。それは子孫を守る力が大きいからだという。祖父を「三華千神」、曽祖父を「四華干神」といい三代は特別の名称で呼ぶ。祖父以上の一般名称は「公干神」（gongan）という。曽祖父までは祖先祭祀の対象である［《水族民俗探幽》編集委員会　一九九二：二四七］。

参考文献

［日文］

大橋健一・松平誠　一九九二「祭りと文化変容（一）―中国広西壮族自治区壮族の蟆拐節―」『応用社会学研究』三四号、東京：立教大学社会学部、二五七～二六六頁。

繁原　央　二〇〇四「貴州省黔南水族調査」『日中説話の比較研究』東京：汲古書院、二九七～三二三頁。

鈴木正崇　一九八五『中国南部少数民族誌―海南島・雲南・貴州―』東京：三和書房。

鈴木正崇　一九九二「銅鼓と魚と馬―水族の端節にみる世界観―」『季刊　自然と文化』三七号（特集　儀礼と生命原理）東京：日本ナショナルトラスト、一四～二七頁。

鈴木正崇　一九九五「銅鼓の儀礼と世界観についての―考察―中国・広西壮族自治区の白褲瑤の事例から―」『史学』東京：三田史学会、第六四巻三・四号、一三～三一頁。

鈴木正崇　二〇一一「少数民族の伝統文化の変容と創造―中国貴州省トン族の場合―」国際宗教研究所（編）『現代宗教　二〇一一』東京：秋山書店、二五八～二八二頁。

鈴木正崇　二〇一二『ミャオ族の歴史と文化の動態―中国南部山地民の想像力の変容―』東京：風響社。

長谷千代　二〇〇七『文化の政治と生活の詩学―中国雲南省徳宏タイ族の日常的実践―』東京：風響社。

西田龍雄　一九八〇「水文字暦の解読」『言語』一九八〇年八月号、東京：大修館書店、八八～九五、一〇六頁。

百田弥栄子　一九九一a「竜鳳文化を求めて」（竜の住む地―中国貴州の少数民族三―）『春秋』三三一九号、東京：春秋社、一七～二一頁。

百田弥栄子　一九九一b「銅鼓と鳥と雷神と」（竜の住む地―中国貴州の少数民族六―）『春秋』三三三一号、東京：春秋社、二四～二八頁。

百田弥栄子　一九九九『中国の伝承曼荼羅』東京：三弥井書店。

百田弥栄子　二〇〇四『中国神話の構造』東京：三弥井書店。

［外文］

范　禹（主編）　一九八七『水族文学史』貴陽：貴州人民出版社。

貴州民族学院・貴州水書文化研究院（編）　二〇〇九『水族学者　潘一志文集』成都：四川出版集団巴蜀書社。

劉之侠・石国義　一九九九『水族文化研究』貴陽：貴州人民出版社。

羅　春寒　二〇〇九「水族、水書和水書研究」潘朝霖・唐建榮（主編）二〇〇九『水書文化研究』貴陽：貴州民族出版社、二八〇～二九三頁。

馬学良・今旦（編）　一九八三『苗族史詩 HXAK HMUB』北京：中国民間文藝出版社。

潘　一志（編）　一九八一『水族社会歴史資料稿』三都：三都水族自治県民族文史研究組。

潘　朝霖　一九九一「水族〝蘇寧喜〟節」貴州省文化廳群文處・貴州省群衆文化学会（編）『貴州少数民族節日大観』貴陽：貴州民族出版社、二八一～二八四頁。

潘　朝霖　二〇〇九「水書古籍搶救概況及版本鑑定定級宙視」潘朝霖・唐建榮（主編）『水書文化研究』貴陽：貴州民族出版社、三四九～三五六頁。
潘　朝霖・韋宗林（主編）　二〇〇四『中国水族文化研究』貴陽：貴州人民出版社。
潘朝霖・唐建榮（主編）　二〇〇九『水書文化研究』貴陽：貴州民族出版社。
彭兆榮・牟小磊・劉朝暉　一九九七『文化特例―黔南瑤麓社区的人類学研究―』貴陽：貴州人民出版社。
覃　剣萍　一九八八「壮族蛙婆節初探」『広西民族研究』一九八八年第一期、南寧：広西民族学院、七〇～七三頁。
芮　逸夫　一九三八「苗族洪水故事与伏羲女媧伝説」『人類学集刊』第一巻一号、国立中央研究院歴史語言研究所（『中国民族及其文化論稿』下冊、台北：台北藝文印書館、一九七二、一〇二九～一〇七七頁、再録）。
三都水族自治県志編纂委員会（編）　一九九二『三都水族自治県志』貴陽：貴州人民出版社。
石　啓貴　一九八六『湘西苗族実地調査報告』長沙：湖南人民出版社。
石国義・韋仕通・石昌安　二〇〇七「恪守倫常家族凝聚的水昂村―水昂村社会調査―」石国義（編）『水族村落家族文化』貴陽：貴州民族出版社。
《水族民俗探幽》編集委員会　一九九二『水族民俗探幽』成都：四川民族出版社。
《水族簡史》編写組　一九八五『水族簡史』貴陽：貴州民族出版社。
王　品魁　二〇〇九「水書源流初探」潘朝霖・唐建榮（主編）『水書文化研究』貴陽：貴州民族出版社、五三～五九頁（初出「《水書》探源」『貴州文史叢刊』一九九一年三期、一三七～一四〇頁）。
王　品魁（訳注）　一九九四『水書・壬辰巻・正七巻』貴陽：貴州民族出版社。
王　品魁・潘朝霖（訳注）　二〇〇五『水書・喪葬巻』貴陽：貴州民族出版社。水族
韋　章炳　二〇〇七『中国水書探析』北京：中国文史出版社。
韋　忠仕　一九九一「水族天文暦法試探」『黔南教育学院学報』一九九一年四期、四一～四八頁。
祖岱年・周隆淵（編）　一九八四『水族民間故事』貴陽：貴州人民出版社。
祖岱年・周隆淵（編）　一九八八『水族民間故事選』上海：上海文藝出版社。